



TITLE:

[書評]James Williams, Gilles Deleuzes Difference and Repetition: A Critical Introduction and Guide

AUTHOR(S):

得能, 想平

CITATION:

得能, 想平. [書評]James Williams, Gilles Deleuzes Difference and Repetition: A Critical Introduction and Guide. 京都大学文学部哲学研究室紀要 2011, 14: 91-95

ISSUE DATE:

2011

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/173147>

RIGHT:

書評

James Williams,
*Gilles Deleuze's Difference and Repetition:
A Critical Introduction and Guide.*
Edinburgh University Press, 2004.

得能想平

本書は、タイトル通り『差異と反復』を馴染みのない読者に紹介し、ドゥルーズ哲学への橋渡しを行っているのも確かである。よく知られている通り、ドゥルーズは多くの概念を持ち出してくる。現実性(actuality)と潜在性(virtuality)と実在性(reality)の厳密な区別や、反一実現(counter-effectuation)、副次的矛盾(vice-diction)、受動的綜合(passive synthesis)などの耳慣れない概念は『差異と反復』を初めて手にとる読者をたじろがせるだろう。著者はこれらのキーワードをそれぞれ取り上げ、日常的な具体例を挙げてわれわれの想像力を助けてくれる。さらに、『差異と反復』の一セクションに対して一章を割り当てて解説してくれるところも心強い。

しかし、本稿が注目するのは、著者が行う別の試み、つまり『差異と反復』を論証という視点から読みなおすと言う部分である。著者は、論証(argument)と妥当性(validity)に注目することこそが『差異と反復』を理解するために重要であると考え。われわれはこの試みを追うことにしよう。多くの概念が散りばめられているが、柱となるものはやはり差異と反復の二つの概念であるだろう。この二つの概念が『差異と反復』の中でそれぞれどのように規定されるのか、そしてどのように関係するのか。はっきりとした目標の提示にも関わらず、著者の論は曖昧になるところも多いが、著者の意見をなんとか掬い取って見ていくことにしよう。全八章のうち本稿が扱うのは、主に第三章、第四章、第六章、第七章の内容である。

まず、差異とはどのようなものかを見よう。ただ、これは少し奇異にうつるかもしれない。というのも、われわれはすでに差異の非常に明快な具体例を挙げることができるし、哲学史の中に差異を規定する十分な仕方を見つけることができるからだ。きゅうりとトマトの違い、精神と肉体の違い、電話と電話ボックスの違い。なんでも良い。任意の二つの対象を適当に選びさえすればそこに差異のサンプルが現れる。さらに、われわれはアリス

トテレスに起源をもつカテゴリー、類種関係によって、対象の差異を分類することができる。たとえばきゅうりとトマトは、野菜という類において、実の形や、花の咲き具合、根の張り方が違うと言えるだろう。共通部分を前提にして差異と類似点を探し、さらに分類を進める。すると観察や実験が進むにつれて差異は体系化されていくことになる。ある点では一致し、ある点では違っている、このような差異はわれわれにとって非常に扱いやすいものであると言える。

ところがドゥルーズが規定したいと考えているものは、このような差異ではない。この差異を可能にするための条件である。ドゥルーズは、この条件としての差異を「純粋差異」と呼ぶ。純粋差異は、ある対象とある対象を比べることで認識されるものではない。というのも、もし、そのように認識されるのであれば、通常の差異と変わらないからだ。しかし、この差異を作り出す原因である以上、通常の差異と同じような何らかの差異性を持っていなければならないだろう。こうして、差異が可能になる条件が純粋差異と呼ばれることになる。

次に反復を考える。ドゥルーズがまず注目することは、われわれは予期(expectancy)することができるという事実である。今日の夜は満月だろうでも、踏切が閉まれば電車がやってくるでも、なんでも良い。このような予期ができるためには、前もって反復がなければならぬと、ドゥルーズは考える。というのも、いかなる出来事を二つ取ってきたとしても、その間に必然的な関係が存在するとは言えないからである（著者は、言及していないがこの点の論証に関してはヒュームに詳しい）。人間に限らず、生き物が予期できるのは、そこに習慣による学習があったからである。純粋差異が、類種関係やカテゴリーの条件として考えられたように、反復もまた予期の条件としてここでは考えられている。

このようにして、現在という時間カテゴリーにおける予期という行動のために、過去の体験が参照され、取りまとめられることを「受動的総合」と呼ぶ。これは過去が縮約(contraction)され、現在の行動に影響を与えているということであるが、注目すべきは受動的という部分である。反復は意識とは関係なく記憶され、意識とは関係なく予期のために総合される。たとえば、ドアノブを回せばドアが開くや、スイッチを押せば明りがつくといった判断を考えてみよう。われわれはすでにこのような反復が何回繰り返されたかを覚えていないし、最初にいつドアノブを回し、スイッチを押したか覚えていないだろう。われわれの予期のために、過去の体験が活かされているはずであるが、どの体験が活かされているかは特定できない。われわれの判断は、無意識的で受動的な過去の体験の総合によっているのである。

ドゥルーズはこれをさらに拡張し、ある未分化の現れそのものから対象の同一性を取り

出してくるためにも、反復が必要だと考える。つまり、対象の同一性を作り上げる能力も習慣によっていると考えるのである。これは、いかなる未分化の現れから対象を取り出すにしても、現れからその対象を切り出す必然的な根拠は存在しないという点において保証されるだろう。いまだ秩序が与えられていないカオスから対象を作り出すことは、学習されるものであるとドゥルーズは考える。この対象化の能力は、行為や欲求をもつためにも本質的な役割を果たすだろう。予期の条件と対象の同一性を生み出す能力の条件を一致させることで、反復という時間の受動的総合が果たしている役割は格段に大きくなる。

ここまでわれわれは単純化されたものであるが、差異と反復というそれぞれの概念がどのようにして規定されるか見てきた。差異は類種関係を可能にする条件として、反復は対象の同一性を獲得するための条件として、それぞれ定義される。こうして並べてみるとこれらはそれぞれ補いあう概念であることがわかるだろう。差異は、経験されるものの同一化の条件として、反復は経験するものの同一化の条件としてそれぞれ相互に規定しあう関係である。

そして、このことが『差異と反復』という書物をわかりにくくしている原因であるとも著者は述べている。この本の序論では、差異と反復という二つの主題の具体例として絵画や小説などの芸術いくつも挙げられただけで、差異と反復がそれぞれどのようなものであるか、そしてどのように関係するかは曖昧な形でしか書かれない。そして、本格的にこの二つの概念が理論的に説明されるのは、『差異と反復』の第四章以降をまたねばならない。というのも、この相互規定が解決されることなしには、二つの概念の論証ができないからである。そうであるから読みとおすことなしにはこの本を理解するのはむずかしい。著者がこのことをはっきりと述べたことは、本書の良い点の一つであるとわたしは考えている。

さて、最後に確認するのは、差異と反復がそれぞれどのように相互規定をし、一貫性を持つかということである。反復は、純粋差異を体験することで対象の同一性を得ているが、そもそも反復そのものが作用するためには、純粋差異が過去を構成していなければならない。差異は認識の条件である存在として規定され、反復はその存在を認識するための、偏った差異の集合として考えられる。つまり、反復は差異を取り込むものであるが、その取り込む作用のためには差異が働いているということになる。

このような差異と反復の絡み合いは、次に認識論的な首尾一貫性を要請されることになる。つまり、差異と反復という存在論的な非常に大きな枠組みの中で、主体としてのわれわれの認識が説明可能かどうかが問われることになる。つまり、差異と反復によって得られた存在論的な枠組みを用いて、認識論そのものを書き換えようとするのである。たとえば、目の前のリングをリングとして対象化するためには、未分化の現れやセンサーデータと

しての感性だけでなく純粋差異の知覚も必要となるだろう。同様に、言語などの概念を、少なくとも使用に耐える程度の客観性をもったものとして認識できる必要があるだろう。こういったことがらとの共立性を取りながら、ドゥルーズは認識がどのようなものでなければならないかを考える。

この共立性に関する議論は、本稿の目的とは別に大きな問題を提示する。というのも、認識のレベルの規定であるので、認識に関わるいかなる直観をもこの差異と反復からなる存在論によって説明しなければならないからである。

われわれは、概略を述べるにとどめよう。主体を認識論的に説明するに際して、ドゥルーズは「観念(idea)」と「強度(intensity)」という二つの概念をさらに導入する。観念は独自の問題関心に従う想像力を構成するものとして、もう一方で強度は、差異から対象を取り出す際の独特な感じを感じさせるものとして説明される。観念は、われわれの言語活動や想像が可能である限り判明である一方で、純粋差異という存在から構成されている以上、複合物であり混雑したものである。そして、強度ははっきりと感じられるものとして明晰であるものの、言語化できないものとして曖昧であると、述べられる。

さて、われわれは差異と反復の規定、そしてそれらの相互規定、そして認識論との首尾一貫性、共立性について駆け足であるが見てきたことになる。ここでわれわれの当初の目的であった論証という観点から、まとめてみよう。差異は、類種関係の条件として、そして反復は予期や対象化の条件としてまず考えられた。さらに、反復の条件としての差異、そして差異の条件としての反復という点をそれぞれ確認した。この差異と反復の相条件性によって生まれた存在論的な枠組みが、今度は認識を説明する。著者が提示する論証という点から読みなおす試みはこのように形をとることになっているとわたしは考える。

さて、この枠組みが、本当に『差異と反復』の中で提示されたものを適切に要約しているかということを判断することは、論者には荷が重すぎる。よって、この枠組みから結論されるいくつかの興味深い点を指摘することで、この書評を終わりとしたい。

まずは、この論証そのものが経験的な次元から始まり、経験的なものとして終わっている点である。たとえば、類種関係の条件として、差異が定立されたわけであるが、この類種関係はそもそも、カテゴリー化された差異を取ってくることができるという原理や主体の能力についての事実問題として取り上げられている。つまり、どうして類種関係としての差異が存在するかというのは、経験的に蓋然的に証明される。それは予期、対象の同一性についての論証も同様である。これらの事実問題は、経験によって確かめられる。

そして、条件としてそれぞれ規定された差異と反復は、その相互規定の段階を経て、また認識論の形式を規定するものとして用いられている。この段階において、言語で表現で

きる以前の感覚が強度として、そして、われわれの問いを可能にする思考の対象が観念として形式化された。つまり、個別的な経験による原理（種類関係、予期、対象化）が、差異と反復の存在論を媒介することによって、認識そのものを一般的に規定している（強度、観念）という枠組みになっている。言い換えると、一度、条件という別の秩序（差異、反復）に移った論証が、再度条件という秩序から経験、認識の秩序（強度、観念）へと戻されている。このことから、われわれはドゥルーズの論証において、もしくは、論証そのものにおいて、認識論という次元が非常に大きな役割を果たしていると考えることができるのではないか。

もう一つは、「条件」というものを定立させることが、この論証において重要な位置を占めているということである。種類関係の条件として、予期、対象化の条件として、差異と反復がそれぞれ定立されるわけだが、ある原理の条件をその原理そのものとは違うものとして定立することは、無反省にすべての原理に関して行うことができる操作であるのだろうか。言い換えれば、何らかの原理に対して条件をとるという行為が、制約なしに可能であるとするならば、不都合なことが起こることはないのだろうか。そして、条件づけられるもの(原理)と、条件づけるもの（差異、反復）の峻別が、表象や本質を取り上げずに対象の構成を扱う、ドゥルーズの存在論を規定する論証の要になっているのではないか。

論証という視点から『差異と反復』という書物を読みなおすことは、ドゥルーズの存在論が、規定し規定されることになる認識能力という次元へと、そして条件と原理という特殊な存在者の次元へと開かれているということを明らかにする点で、有益であると考えられる。しかし、論証という視点の可能性は汲みつくされていない。経験や認識とそれらの条件という区別は論証においてどのようなステータスを持つのであろうか。われわれは、著者から問題を受け継いで、さらに深い探求を行わなければならない。